

近現代日本 150 年の労働者・民衆の闘いの歴史

第三章 世界大恐慌～日中戦争開始まで(前半)

第三章後半 Report & Talk 記録(2020/3-2021/2)

2020 年

- 3月29日(日) プチ労 110 回 レポーターGO
第三章後半 1930 年代の日本の労働運動と農民運動 (概説)
(4月プチ労コロナで中止)
- 5月31日(日) プチ労 111 回 再開「コロナの時代ってなにか」
- 6月28日(日) プチ労 112 回 レポーターあさみさん&GO
(4)「労働の尊厳」を広く追及した 1930 年代の労働運動
第一節概説(GO)、
第二節 最高潮の契機 - 東洋モスリン等繊維業女性労働者の闘い(あさみさん)
- 7月26日(日) プチ労 113 回 W レポーターあさみさん&しょうごさん
第三節 広がる労働者の蒸気 - 遊郭の女性たちのストライキ
- 8月30日(日) プチ労 114 回 レポーターけんいちさん (GO 代役)
第四節 「左派の闘将」東交(東京交通労組)市電労働者の闘い (前半)
- 9月27日(日) プチ労 115 回 レポーターゆいちゃん
第四節 「左派の闘将」東交(東京交通労組)市電労働者の闘い (後半)
- 10月25日(日) プチ労 116 回 レポーターなおこさん
第五節 1930 年代労働運動を鼓舞し続ける在日朝鮮人運動
- 11月29日(日) プチ労 117 回 レポーターGO
第六節 労働組合壊滅、しかし、吹き続けていた労働者の蒸気
- ◎12月 プチ労望年会 (中止)
- 2021年1月24日(日) プチ労 118 回 レポーターむぎたさん
(5)「国体」を掘り崩す農民運動
第一節 敗戦まで一貫して左派が主流だった農民運動
第二節 農民各層が結束した新潟王番田(おうばんだ)の大争議
- 2021年2月28日(日) プチ労 119 回 レポーターむぎたさん
第三節「地主的土地所有」を追い詰めた北海道蜂須賀(はちすか)大争議
第四節 農地改革を準備した農民運動 - 「土地を農民へ」の意味

・・・・第三章後半終了・・・・

<2020-3-29 プチ労 110 まとめ>

参加者：8人(Ysさん友人Nさん初参加) 中高年：青年＝3：5 地域：それ以外＝5：3

メニュー：キーマカレー、ナスのザブジ(ココナッツミルク和え)

◎「近現代日本 150年の労働者・民衆の闘いの歴史」第21回

第三章後半 1930年代の日本の労働運動と農民運動(概説)

レポーターGO

昨年から、1年間かけて、1930年代、ドイツ労働者のナチスとの闘い、アメリカでニューディールを引き出した労働者の闘い、そして、日本の「満州」侵略を前回しょうごさんのいいレポートで第三章前半を終わって、新しい「草稿」で第三章後半、日本国内の労働運動と農民運動に入る。

「草稿」表紙についている写真は、この時期の闘いの主力が、女性と在日朝鮮人だったということで、大阪南の遊郭の女性がストライキに勝利して歓呼する写真と、アソウの親父が社長で、ひどい労働条件と虐待で有名だった福岡麻生炭鉱の在日朝鮮人争議の新聞記事。

○1930年代日本の労働運動

新しい「草稿」4頁にあるとおり、1930年代の労働運動は、一般に「満州事変が勃発し、労働組合が一斉に『右傾化』して敗北し、日中戦争とともに始まる国家総動員体制で壊滅する」と言われる。

しかし、今、あらためて見るべきことは、前に見たように、ドイツ労働者階級があと一步でナチスに敗れた、まさに、その「あと一步」であった「資本に奪われた労働の尊厳」をめぐる、日本の労働者が必死に闘ったことではないかというのが問題意識。

現代の非正規化のなかで、まさに奪われている労働の尊厳。

しかし、1920年代当初、「自分たちがつくらなければこの世になかった団結」という労働運動の原点、「自分たちの尊厳を自分たちで確立する第一歩。」を日本の労働者は発見した

1930年代の労働運動は、そういう1920年代の労働運動が見せた「原点」を引き継ぎ、広げ、掘り下げて、敗戦後「革命期」につなげたのではないか。

その主力として登場した女性労働者、在日朝鮮人労働者の運動を中心にしていきたい。

○1930年代日本の農民運動

「草稿」71頁冒頭にあるように、農民は「保守的」で国家を一番支えたと一般に見られがちだが、大半が「右傾化」した労働運動とは逆に、1930年代の農民運動は、「天皇制国家を前提として、それに支えられた地主との協調を旨とする」右派に対して、「地主支配体制と妥協せず、天皇制国家とも果敢に闘う」左派が、第二次大戦敗戦まで一貫して主流だった。

それが、どうしてだったのか、農民はどうして闘い続けられたのか。

それを、新潟と北海道の争議の実例を通して見ていきたい。

また、「敗戦後の農地改革はアメリカに与えられた」という通説とは異なるが、そうした農民運動が、「国体」の地盤を掘り崩し、敗戦後の農地改革の前提を準備していったということも見ていきたい。

以上

<2020-5-31 プチ労 111回まとめ>

参加者：9人 中高年：青年＝4：5 地域：それ以外＝5：4

メニュー：沖縄タコライス、ナスの黒糖甘炒め煮

◎「近現代日本 150年の労働者・民衆の闘いの歴史」番外

Talk 「コロナの時代ってなにか」

資料：たみとやジャーナル 133号・134号、ふくしま共同診療所布施院長「COVID-19と福島原発事故」、バク（十亀）さんからの獄中書簡

「コロナで権力が奪うもの」それは「人が会う自由」。

1回休みの後のプチ労に時間より早く来る人が結構いて、意見や議論も活発。

権力が絶えず奪おうとするのが、人の団結、連帯ともいえる「人が会う自由」なんだって実感。

話せてよかった！

次回6月28日プチ労は、「歴史」に戻って、アサミさんレポーターで、1930年代日本の労働運動に入りますので、よろしく。

●感染対策、マスク

Mm：住んでいる区営住宅は高齢者も多く、人にうつさないということでマスクをしている。

Uy：職場では2グループに分けられマスク強制。なので仕事以外ではあまりしてない。

Mg：コロナを特別視したくない。インフルと変わらないという見方もある。自然にないものをつくりだして、そもそもからマイナスの効果である放射能とまったくちがう。しかし、当局は3.11と同じくデータを隠ぺいし、不安と相互監視が強まるのを放置している。

Mk：しかし(一人一人の問題としては)、「政治」と「サイエンス」を区別して、インフルと変わらないかまだわからないなかで、コロナは空気感染でなく飛沫感染ではあるとわかっているのに、死者を少しでも減らすために、マスクした方がいい。

Nh：自分は罹病してないのでマスクしてません。「緊急事態」でも、ほぼ何も変わらず仕事と生活している。

Ys：そも、ここに集まっている人は、自分で感染のリスクを判断していると思う。

●コロナで権力が奪うもの

Mg：遺体に対面させない。そういう倫理観を奪う。

N：イタリアの哲学者も第一に死者の尊重の権利を奪うと言っていた。

Mk：日本では、韓国ともちがって、ほんとに自分で判断させるデータを出さない。人口比での致死率はアジアで日本が最も高いのに。逆に「移動の制限」をいうが、デモなどマスクなどの対策でやれる。

GO：獄中のバクさんから手紙をもらったが、「移動の自由」を剥奪する究極は刑務所。

Mg：それは「移動の自由」というより、「人に会う自由」を奪うこと、人の分断。

Mm：ほんとに息苦しい。鬱。好きな映画館閉まるし、たみとやないし、教会も自粛。

N：私たちは、ほんと社会的存在なんだ。

Am：居酒屋のバイトは、「自粛警察」にガラス割られたりして休業して、なくなった。

●どうなる？ どうする？

GO：バクさんの手紙には、コロナは、「新自由主義の崩壊を示し、プチ労の歴史区分を変えるのではないか」とあるが、どうか。

Uy：コロナは、今までで一番ひどい事態

Mk：歴史の残るかどうかは、みんなが大変だったと思うかどうか。

Mg：確かにコロナで、グローバル化のツケ、より速く遠くってということから、

我々の身の周りへ帰ってというのが、本来の教訓として示されたはず。しかし、実際は、ネット、オンライン化の一層の推進。社会を戻さなければ！

Ys：しかし、相当普及している I-Phone などは、みんなの使い方次第。

GO：ただ、スーパーシティ法がドサクサに成立したが、I-Phone を持っているだけで、データをとられ、ビッグデータとして監視・管理・利用されていく方向。

以上

<2020-6-28 プチ労 112 まとめ>

参加者：8人 中高年：青年=3：5 地域：それ以外=5：3

メニュー：6月恒例インドネシア風肉味噌丼、タフ・ゴレン・サンバル(厚揚げとトマトの甘辛炒め)

◎「近現代日本 150 年の労働者・民衆の闘いの歴史」第 22 回

レポーターあさみさん

第三章(4)「労働の尊厳の奪還」を広く追及した 1930 年代の労働運動

第一節概説(GO)、

第二節 最高潮の契機 - 東洋モスリン等繊維業女性労働者の闘い(あさみさん)

自前の資料も含めて、レポーターの小気味のいいレポートで、亀戸の女工たちの闘う魂ー「南葛魂」、今につながる女性労働者の戦争を止めたかもしれない闘う力が、くっきりと浮かび上がった。

GO：第一節は、個々の現場の闘いを見る前の概説として、労組団体の変遷を見ている。

前に見たように 1920 年代後半、評議会が総同盟から分裂して以降、現場労働者が戦闘的になるにつれて右派から左派への分裂が続いたが、「満州事変」以降、戦争を支持する右傾化になる。その離合集散、わかりにくいので「早わかり表(6P)」を見てほしい。

そのなかでも、評議会を引き継いだ「非合法」の左派、全協が運動の軸となっていく。

ちなみに、「合法」「非合法」とは、労働組合法がない戦前では、治安維持法違反と認定されるかどうかだった。だから「合法・右派」といっても、今の「御用組合」とちがって、会社はすきあらば追い出そうとし、逆に組合は相当の実力闘争もした。

Uy：労働組合の「法」がなかったんだな。

Reporter As : 第二節、1930年代に入り、労働運動の先駆けとして、繊維の女工さんたちの闘いが始まる。

繊維女工のストは、1880年代からあったが、1930年になり、東京江東地区、亀戸全体を揺るがす東洋モスリンの大争議が起こる。モスリンは、後の化繊の前の薄いウール地の織物。亀戸全体でも女性労働者は4割を占めていた。

亀戸は、関東大震災の時に、虐殺された朝鮮人と連帯して弾圧された南葛労組など、1920年代から戦闘的労働運動のシンボル「南葛魂」発祥の地。

Mg : 今でも、漫画「キャプテン翼」の中にも「南葛魂」と描いた応援旗などがよく出てくるが、あれか。

As : 1930年9月、会社の大量解雇発表で、2,500人(うち女工2,000人)の労働者が全員ストに突入し工場内に立てこもる。亀戸住民7万人が連帯して支援。

10月には、江東地区で争議中の労働者と連帯し、地区のゼネストになる。

会社は、女工の郷里の親たち、女工保護組合を逆利用して切り崩しを図るが女工たちは頑張る反面、幹部の検挙が続いて組合指導部(全労 - 合法中間派)が弱気になり11月によりやく争議は終結。

結果は、組合組織一掃という惨敗だったが、亀戸住民全員が支援し、江東地区ゼネストとして城東電車・第一製薬・青木ロールなどの争議は勝利させるなど大きな成果を残した。当局も必死だった。⇒資料参照。

平均年齢17歳の女工たちだった。

Ys : すごい、すごい！こんな闘いがあったんだ！



N : 1920 年代半ば、長野の諏訪地方でも、女工たちの搾取はひどかったが、なかなか立ち上がれなかった(その後、1933 年、長野県での 2.4 事件と言う大弾圧は、諏訪の女工たちが立ち上がったことだった)。

亀戸の彼女たちはどうして立ち上がったんだろうか。

Uy : 「草稿」にも、女工さんたちが勉強する「労働女塾」が紹介されているが、13-14 歳で女工になり文字も読めなかったのが、勉強していったからかな。

<織本(帯刀)貞代の「労働女塾」>



GO : 1929年7月、ようやく、1911年工場法の女性の深夜業禁止規定が施行され、「勉強する時間」が多少できたこともある。

そして、前にアメリカの労働者が1936年に創造的な「Sit-Down strike(工場座り込みスト)」を編み出したことを見たが、それより、女工たちの工場占拠は6年も早い。

国鉄闘争呼びかけ人の近代史研究者伊藤晃さんは、「紡績女工たちは労働者の国際連帯の最前線にたっていた」と言う。(「草稿」17p コラム参照)

中国侵略の尖兵も紡績資本であり、1920年代後半からの中国の労働運動の契機は日本の紡績資本だった。中国の労働者との連帯が戦争を止めていたかもしれない。

しかし、日本で紡績業は「基幹産業」ではなく「女の産業」と呼ばれ、労働運動でも女工は「補助的出稼ぎ労働者」だった。主力であるのに主役にされなかった。世界では、こうした「人権、人間として生きさせろ」という「普通の労働者」の運動は、労働運動の歴史を貫く赤い糸である。

ファストファッションの裏側を描いた映画「TRUE COST」に登場するアジアの女性縫製労働者や我々も支援したアメリカンアパレルユニオンの闘争にも見られるように、今も、女性の労働の尊厳の問題は同じであり、「普通の労働者」として見る目が問われ続けている。

次回7月26日プチ労113回目は、「第三節 広がる労働者の蒸気—遊郭の女性たちのストライキ」。引き続きあさみさんと、独自に研究していきましょうごさ

そして、一人一人に問いかけるトークとして、“セックワークは労働か”
これは、現代日本に引き続き「根深い買春の意志」、それと裏腹な「女性差別」「娼婦差別」とともに、後で再び見る、現代の我々の問題としての「慰安婦」問題の重要な視点でもある。

Report by As :

東洋モスリンの女工たちに続いて、1931年から、映画館の弁士、少女歌劇の楽士と踊り子、カフェの女給たち、そして遊郭の女性たちへと労働争議が広がる。

映画館弁士たちはトーキー出現で脅威にさらされた。松竹系の争議では、黒澤明の兄須田貞明が委員長だった。楽士の解雇と踊り子の賃下げを契機とした松竹少女歌劇の争議は「桃色争議」として有名。東京では18歳のスター水の江滝子が委員長で湯河原温泉に立てこもり、大阪では26歳のスター飛鳥明子が委員長となって高野山にたてこもり勝利。

一方、1934年には、遊郭の娼妓の倍の10万人にもなったカフェの女給は、女工より派手で、娼妓に比べて自由な労働者のイメージだったが、実態は、一円の給料もなくチップのみで、性的なサービスを競わせられ、娼妓になるものも多かった。

そして、1932年にかけては、遊郭の女性たちのストライキがピークとなる。

1920年代、日本が、植民地には適用除外の「婦女子売買禁止」の国際条約でさえ、ようやく批准した時には、娼妓の廃業や逃亡が一時期盛んだったが、今度の中心はストライキ。

主体性が変化した。自分の仕事として闘うという主体性がすごい。

娼妓の前職の7割は、酌婦であり、女給であり、女工であり、底辺労働者としての女性たちの経験は「地続き」だった。

「草稿(23P～)」で取り上げているのは大阪松島遊郭のストライキ。当時日本最大の遊郭だが、今も大阪では、松島新地と飛田新地が2大風俗街。

彼女たちは学があった。尋常小学校卒も多く、客から学びながら自ら嘆願書を書いた。

その要求もすごい。

「明細書と花代の改善および毎日それを娼妓に示して捺印さすこと」

自分の労働と対価の自己管理を要求している。

友人に聞くと、これは今のソープで実行されている。

さらにすごいと思ったことがある。

彼女たちは、ストライキの途中で、支援の無産婦人同盟との話し合いを打ち切り、遊郭から脱走して警察署に押しかけ、一旦、集団で廃業届を提出するが、何度かの交渉で要求が受け入れられると、廃業届を撤回したこと。

支援者は廃業を勧めたが、娼妓たちが、まず、求めたのは、「やらざるをえない労働」にせよ、その「過酷な労働の条件の告発・改善」だった。

それを通じて、少しずつでも、「人間として生きる権利の獲得」、「労働の尊厳の奪還」に向けて闘っていった。

ストライキ勝利した大阪南地芸妓



Report by Ys :

遊郭では、公娼制のもと合法だったが、搾取され、離脱・相手の選択・移動の自由がなかった。

敗戦後、売春防止法（1958年施行）により、「公然とした性売買地区（赤線等）はなくなったが、ひそかな、あるいは公然とした性売買は現在も広く行われている」（吉見義明「買春する帝国」）

同法第一条は言う。

『売春が人としての尊厳を害し、性道徳に反し、社会の善良の風俗をみだすものであることにかんがみ、“売春を助長する行為等を処罰”するとともに、性行又は環境に照して売春を行うおそれのある“女子に対する補導処分及び保護更生の措置”を講ずることによつて、売春の防止を図ることを目的とする』

つまり、女子のみ対象。男は、買春はまったくいいとされている。

さらに「対償を受け、又は受ける約束で、不特定の相手方と性交（*性交類似行為は除かれている）すること」（同法第二条）と定義された「売春」は、第三条で「何人も、売春をし、又はその相手方となつてはならない」と禁止されながら、刑事罰はなく、「特定の相手方」とする「単純売春」も合法だが、女子は保護と言いながら刑事・補導処分の対象となる。

売春を禁止する根拠は、法の第一条にある「人の尊厳を脅かし、善良な風俗を乱

す」ことであるとともに、セックスワークは、マルクスのいう搾取より広く「本質的に搾取」だから。

それに対して、非犯罪化を支持する論拠は、「セックスワークは労働であり、その中に存在する経済的搾取は他産業においても共通の物で、労働法により改善されるべき」ということ。また、「セックスワーク＝貧困」ととらえることが社会的差別のスティグマ（しるし）になる。

2015年には、国際人権団体アムネスティが、売買春の合法化（合意に基づく成人の性的労働や成人同士の間での合意に基づく性の売買）を支持する方針を決定した。

ヨーロッパでは、売春自体は合法である国家がほとんどである。さらに、売春の斡旋についても、2000年のオランダを皮切りに、デンマーク、フランス、スイス、ドイツ、オーストラリア、ニュージーランドなども合法化に踏み切っている。買春（顧客）のみを取り締まる「買春の犯罪化」モデルもスウェーデンなどで実施されているが、逆に客層が悪くなり、セックスワーカーが危険にさらされるという指摘もある。

日本でも、自分もレインボープライドで出会った SWASH など、セックスワーカー自身の団体が、「セックスワーカーを労働者として迎えた労働運動を」とシンボルである赤い傘を掲げて活動している。

<SWASH>



セックスワークは労働か

N：みなさん、セックスワークは労働と思うか。たしかに、1930年代とちがって、今では「売られる」ことは少なくなっているが。

Mm：「させられている」面もまだ多い？ そうすると「搾取」？

Uy：僕は、仕事だと思う。男も、いやだけど、つまらないけどしている仕事も多い。

Nh：現代で裁判的に判定するのは、「労働」の定義。対価はどうで、指揮命令されているとか、。。 その意味では、労働だろう。

Mg：「慰安婦」もそうだが、強制労働かどうかだと思う。

Ys：マルクスの言うように、労働といっても、疎外された労働ともいえる。

Mm：しかし、歴史上、たえず、続いてきたのが、「セックスワーク」。

GO：ただ、今日、見た「遊郭の女性たち」と、話を聞いた現代の SWASH の赤い傘を掲げた女性たちとは、共通して、「労働運動の根源」というか、すごいなと思う。

Mg：「草稿」にある娼婦運動の婦人たちの「賤業視」を批判した伊藤野枝の「(遊郭の彼女たちに)ぞっとするような凄惨な感じに打たれる」という言葉がすごい。彼女たちの強さを言っている。その「強さ」は、障害者だからこそ持つ強さ、貧乏人だからこそ持つ強さとも共通する。

N：彼女たち、ほんとにすごい。しかし、そのうえで、性交を続けて行った場合には、妊娠や中絶、あるいはそうでなくても、女性の体に傷としてたまっていくものがあるのではないか。「慰安婦」問題でもそうだが、「買春」側の男の人たちが、自分の彼女や奥さんや娘が、「労働」としてであれ、どう思うかということ。

GO：自分の身近な人が、暴力的ではないが、社会的・経済的に「ざるをえない労働」に就いた時どうするか。それを否定するというより、まず、その社会的経済的条件や困難を一緒に何とかしようとするのかな。

それでも、経済的搾取にとどまらない体の『搾取』をどう考えるか。。。

一方で、日本社会に続く「娼婦蔑視」その根底にある「女性差別」に対抗するものとして、W ジェンダーを含めて、最近広がっている多様な性認識と行動をどう考えておくか。。。

これらの論点は、第四章「日中戦争から敗戦～昭和天皇の戦争」のなかで、「日本女性の戦争への関与」や「慰安婦」問題のところで、あらためて、考えていきたい。

今回は、(4) 1930年代の労働運動－第四節「左派の闘将」東交（東京交通労組）市電労働者の闘い。

以上

<2020-8-30 プチ労 114 まとめ>

参加者：8人(現役大学生 Mh さん初参加) 中高年：青年＝4：4 地域：それ以外＝5：3

メニュー：夏恒例チキンカレー、ナスとじゃがいものザブジ(by N さん)

◎「近現代日本 150 年の労働者・民衆の闘いの歴史」第 24 回

レポーターGO (けんいちさん代役)

第三章(4)「労働の尊厳の奪還」を広く追及した 1930 年代の労働運動

第四節 「左派の闘将」東交(東京交通労組)市電労働者の闘い(前半)

今回と次回は、今まで見た女工たちや遊郭の女性たちのストライキの後ろ盾になり、戦前の戦闘的な労働運動の現場の中心になり続けた東交の闘いの歴史。

20 世紀当初から、アジア太平洋戦争の時期を除き今に続く、日本で最も長い歴史を持ち、当時単一の組合では最大の組合員数の東交の歴史は、組合員の具体的な要求に基づく「自治」—自分たちのことは自分たちで決めるという労働組合の原点を見せてくれる。

東交は、世界恐慌の直前、1929 年 6 月に東京市電労働者と市バス労働者、1 万 3 千人で結成された。

東京市電は、東交の前身である市電自治会が、20 代の青年労働者のリードで結成された 1924 年、資料 1 の路線図のとおり、東京中をくまなく走っており、一日の乗客数は、当時の東京の人口 217 万人の 6 割を超える 136 万人と、「市民の足」になっていた。

第四節では、戦前の東交の闘いの四つの山について載せているが、今回は、第一の山、組合結成直後の 2 派の全線ストライキを含む半年以上に渡る大争議。

市当局は、組合結成前から昇給の抑制など強硬な合理化をすすめようとしていた。

闘わない執行部に憤激した市電の現場労働者は、1929 年 12 月、第一波の全線ストライキ。

退陣したはずの組合元幹部が市長と密会してスト中止を計るが、現場はスト続行し、当局はスト破りもできず、運転車両は 1/3 になったが、市民は応援した。

労働法が何もなかった戦前は、警察が弾圧のかたわら争議の調停もしていたが、警視庁の調停により組合は一部勝利して、1 週間の第一波スト終結。

しかし、翌年 1930 年 3 月の予算で、市当局と市議会が、この調停を全く無視したため、組合は 4 月、第二派全線ストに突入。

世界恐慌が広がるこの時、大阪、横浜、神戸の市電労働者も、東京の民間バス(青バス)1300 人もストに入ったほか、前に見たように、繊維女工たちの大争議

が各地で次々と起こっていた。

日本では、かつて起こったことのない全国的なゼネラルストライキが、まさに、この時、繊維・交通という産業全体で起こる情勢だった。

今回は第一波以上に、組合員 1 万 3 千人が一人の出勤者もなく整然と突入したストで市内交通機関は一斉にストップ。

前回ストでこりた市当局は、在郷軍人会や青年団などを大量に市電を運転するスト破りとして投入し、市電運転を半分再開したが、不慣れな運転で事故が相次ぎ、市民の批判は市当局や警察に向けられた。

152 名の解雇、逮捕などで動揺した組合本部は、なんとこちらから警視総監に調停を依頼し、ストは 1 週間で打ち切られたが、その後も市内 70 か所以上におよぶ支部で現場労働者は闘い続けた。

彼らは、解雇者に救援資金を支給するほか、「解雇者の職場への出入りと入浴の自由」をはじめ、日常的な組合の要求・権利を獲得した。

そして、6 月には、解雇者の復職を 40 名以上は勝ち取って、年末以来の闘争を終了した。

この東交の闘いは、今の日本では、実質、企業毎の組合だけだが、戦後すぐには労働運動の高揚を支えた『産業別労組』を日本で初めて交通労働者に生み出し、国営で労働者の団結が困難だった国鉄(現 JR)にも労働運動を広げ始めた。

この闘争をリードし、底支えし続けたのは、今の JR で闘う労組動労千葉と同様に、組合結成の動力だった青年労働者だった。

さらに、資料 2 の写真のとおり、切符と運賃を扱い、その過不足について毎日勤務終了時に身体検査までされる理不尽な扱いに憤激した市バスの女性車掌たちだった。

本日、まず、参加者からは、今、東京には荒川線しか残っていない都電が、当時は、東京中をくまなく走り「市民の足」になっていたことに驚きの声があがった。そして「その“足”をきちんと運行するためにも、こんなにすごい闘いがあったんだ！」と感嘆の声があがった。

また、当時の市当局の合理化攻勢の背景として、1925 年に省線(現 JR 山手線)開通、1927 年地下鉄開始、そしてタクシーなどのモータリゼーションの進展があった。

しかし、今も、欧州各国の首都や日本の多くの都市には、バリアフリー、クリーンなどの理由で、路面電車が重要な「足」として維持されている。

なので、「今でも路面電車大事。その意味でも市電労働者の闘いは昔の話ではない」「今でも、路面電車が維持されていれば、オリンピックに向けた再開なん

か勝手にはできない」などの声も出た。

次回9月27日プチ労115回は、第四節後半（「草稿」34-48頁）、東交の闘いを見て全員で立ち上がり、「もぐらの歌」として有名になった地下鉄労働者の大争議と東交の闘いの後半。

ゆいちゃんレポーター。

○第三章後半「草稿」27頁から（PDF版↓）

<http://tamitoya.web.fc2.com/history13secondhalf.pdf>

<おまけ>

○電車ごっこ(1932年尋常小学校唱歌)

<https://youtu.be/fJ7WWGXw2Fc>

○東京バスガール(1957年コロムビアローズ)

<https://youtu.be/cJpeAgayTQU>

以上

資料1



資料2



炊き出しするバスの車掌たち。東京市交通局従業員が、1929年末の争議の妥協協約が無視されたのに憤慨して再びストに突入（1930年5月8日）

<2020-9-27 プチ労 115 まとめ>

参加者：8人 中高年：青年＝2：6 地域：それ以外＝4：4

メニュー：恒例北海道名物秋鮭ちゃんちゃん焼ととうもろこしご飯

◎「近現代日本 150年の労働者・民衆の闘いの歴史」第24回

レポーターゆいちゃん

第三章(4)「労働の尊厳の奪還」を広く追及した1930年代の労働運動

第四節 「左派の闘将」東交(東京交通労組)市電労働者の闘い(後半)

(第三章後半「草稿」35Pから↓)

<http://tamitoya.web.fc2.com/history13secondhalf.pdf>

今回は、東交の闘いを見て立ち上がり、「もぐらの歌」として有名になり、非合法(労働法はないので治安維持法上)左派全協の「最も輝かしい一頁」ともいわれる東京地下鉄労働者の1932年の大争議。

地下鉄労働者の現実に立った緻密で多彩な運動づくりで「一分一厘違わない結束」を創って大勝利し、その後、大量検挙で労組は壊滅するが、現代に多くの貴重な教訓を残した。

それから、東交の1930年代の闘いの後半。

東交は、「満州事変」の戦費のための軍用公債引き受けで赤字が膨らんだ東京市当局の2千人解雇に対する1932年10月闘争が失敗し、それを戦闘的にリードした全協が壊滅させられた後、1934年の「全員解雇・初任給で再採用」つまり給料半減という激烈な合理化に対する史上最大の40日間にわたる市電全線ストで勝利し撤回させた。

これは、その後、1980年代、昨年101歳で死去し葬儀費用に税金を1億円弱もかけるという中曽根康弘が首相だった時に、反戦・反原発運動の中心だった日本最大の国鉄の労働組合(国労)を潰すために行った国鉄民営化で用いた「国鉄労働者全員解雇・JRで従順な労働者だけ採用」という同様の方式を50年後まで止めた闘争でもあった。

「満洲事変」が始められ、大半の労組が「戦争賛成！だからストなど自粛して労使協調して生産に励む」なかで、組合員の腹の底から具体的な要求に基づく東交、そして東京地下鉄労組の闘いは、労働組合の原点を示すとともに、今、国鉄民営化反対で闘い続ける労組動労千葉にも直接につながる。

レポーターはこれらの闘いを明快にレポート。

さらに、彼女は鋭く、現代に続く課題を問いかけた。

まさに、「満洲事変」という戦争のための大量解雇でもあったし、共産党と全協が提起した天皇制打倒の闘いまでどうしてやらなかったのか。労働組合は、天皇を頂点にして戦争する支配階級との闘争をやらなければ意味ないんじゃないか。待遇改善の条件闘争だけなら、会社の「懇話会」なんかだけでいい。

東交でも東京地下鉄労組でも、たくさんの女性労働者が粘って闘う主力になっているのに、どうして労働運動の主役にならなかったのか。今も昔も労働運動や社会運動で、「婦人部」などがつくられ、女性たち自らも「婦人〇〇」と称している。古臭い。「婦人」って何だ。

ポイントを押さえたレポートに質疑が次々織り交ざり、流れるように続いて、あつと言う間に終わった感じもした時間だった。

Reporter YY：東京地下鉄では、1932年の大争議の前にも争議があった。13時間の超長時間労働やほこりまみれの汚い労働環境の改善、兵士に見える青い制服を変えろ、などの嘆願書が出され、低速で走る安全闘争に対して、当時取り外せたハンドル取り上げなどで対抗した会社も、労働者をなだめるために「茶話会」を設けた。

その後、1931年1月から、日本交運の永田耀により労組の丁寧な組織づくりが始まる。

この永田っていう人は地下鉄の中の人かな？

GO：非合法左派の全国労働者組織、全協がつくった全国交通産業労働者の組織、日本で初の「産業別労働組合」である日本交運のオルグで地下鉄の外の人。

N：オルグって？

GO：Organizerの略。労働運動とかで、組織づくりをする専門の人。

MG：「永田耀」っていう人は有名な人？

GO：いや、Wikipedia引いても出てこないと思う。

As：永田さんたちが、みんなでうどん食べながら職場のこと話すという「うどん会」を作っていたというのも面白い。「兵隊帰りの相良も参加した」ってあるが、相良さんってどういう人？

GO：兵隊から帰ってきたら初任給に賃金を引き下げられた人で、永田と同様に有名な人ではないが、こういう「名もなき英雄」たちが、地道に労働運動を作っていた。

一同：そうか。

MG：それにしても、「うどん会」に加えて、みんなで話しながら、いろんなサークル活動とかやっていたって面白い。

YY：地下鉄では、女性労働者の問題も山積みだった。地下の売店や切符売り場の女性労働者は立ちっぱなしで 11 時間労働、男性より給料も低く、何よりも地下には便所がなく松屋に駆け込んだ。生理の時は大変で生理休暇はもちろんなかった。

N：11 時間立ちっぱなし！？便所がない！？ひどい！！

Ns：松屋ってデパートの？

GO：そう。当時の地下鉄は、今の銀座線の一部だったから、銀座の地上にあるデパートのトイレを使った。

YY：そうして、1 年間いろんな地慣らしをして、1931 年末に労組を立ち上げ、それから 2 か月、会社にわからないように三味線サークルをやっている振りしたりしながら、さらにいろいろ議論して「方針が一分一厘違わず堂々の結束を勝ち取り、東交のストを見て決意を固め、1932 年 3 月深夜、地下鉄の地上出口に車両を固定して占拠してスト決行。

争議参加者は従業員全員 156 人、うち女性は 3 割、年齢は 16 歳から 25 歳、全員が全協にも加盟した。

多数の警官が巻き上げ機なども使って引っ張り出そうとするのに全員で戦い、4 日間の占拠で、便所の設置から始まる要求をすべて勝ち取る大勝利。

(獲得した要求については第三章後半「草稿」41P 参照)

一か月後に中心活動家 46 人が逮捕され、労組がつぶされるが、まさに「労働の尊厳」に関わる要求項目を全員で一致させたことをはじめ、日本の労働運動史上初めての車両占拠も含め、彼らが残したものは今にいたっても大きい。

N：ほんとに、一から要求を積み上げて勝ったのがすごい！



地下鉄電車内にたてこもり意気上がる争議団



YY：1932年3月、「満州国」が建国され、大半の労組が「戦争賛成！だからストなど自粛して労使協調して生産に励む」なかで、東京市は、財政赤字を理由に10月に市電労働者2000人解雇を通告し、東交の「10月闘争」が始まる。

現場の「闘おう」の声に合法左派執行部がひるむなかで、10月の大会で代わりに全協系メンバーが執行部を占めて12月まで闘争を続けた。

しかし、闘争は、解雇者数の圧縮を勝ち取るものの、多数の逮捕者も出して「失敗」し、その責任をとって、12月の大会で全協系執行部は退陣する。

この失敗について、「戦闘的な組合員も反面、『合法的に何とかなったらいいな』という期待も持っていた。だから合法左派執行部を引かせず表にたてて闘うことが不足していた」と総括された。

GO：また、この「財政赤字」が「満州事変」の戦費調達のための東京市の軍事公債引き受けに端を発していたので、同じころ「天皇制打倒」を掲げた共産党と全協は「天皇制が進める戦争と侵略に対する反戦闘争の大きな発火点」と闘争を位置付けたが、それにも性急さと無理があったと言われた。

YY：でも、まさに、「満州事変」のおかげの大量解雇でもあったし、共産党と全協が提起した天皇制打倒の闘いまでどうしてやらなかったのか。労働組合は、天皇を頂点にして戦争する支配階級との闘争をやらなければ意味ないんじゃないか。待遇だけなら、会社の「懇話会」なんかだけでいい。

GO：そう。しかし、実は、共産党も全協も「天皇制は民衆に相当浸透している」と感じていて、「打倒」といってもどうするか戸惑っていた。

N：どのくらい浸透していたんだろう。

GO : 今もそうだが相当？ 僕自身も数年前まで「天皇なんて関係ない」という感じだった。逆に、労働者が「天皇」に反発したことがあるのは、第二章でやったが、1926 年末、大正天皇が死去した時に、500 人が大量解雇されたが闘争は「不敬」だと抑え込まれた東京市従業員組合が「500 人の労働者だって死んだんだぞ (=解雇は労働者の死)」と叫んだ時。

「打倒」には、そういう多くはない機会を丁寧に紡いでいく必要があった。

N : 私が「労働組合も反戦闘争やるんだ！」って感動したのは、2003 年イラク反戦デモに参加して、動労千葉のひとたちが大勢、デモをリードしていたのを見た時。

GO : 今、動労千葉は組合員 400 人の組合で、千葉県に住む組合員が家に帰れば自民党支持も多いところ。そのなかで、動労千葉は、国鉄民営化反対で立ち上がって以来ずっと、今の労組で唯一くらい、組合費を天引きではなく現金で、執行委員が毎月集めに行っていて、その時に毎回、方針についてひざ詰めで組合員一人ひとりとよく話し合うらしい。

YY : もうひとつ思うのは、東交でも東京地下鉄労組でも、たくさんの女性労働者が粘って闘う主力になっているのに、どうして労働運動の主役にならなかったのか。今も昔も労働運動や社会運動で、「婦人部」などがつくられ、女性たち自らも「婦人〇〇」と称している。古臭い。「婦人」って何だと思う。2010 年でも、女性の労働組合員は 3 割しかいない。

GO : そう！ 地下鉄労組では常任 5 人のうち 2 人が女性だったが、大半の労組の幹部は男ばかりだった。今もわりとそう。この前、第二節でやったように、繊維業の女工たちは、ものすごく数も多く、東交とともに「ゼネラルストライキ」にもなるかというすごい闘いをしたが、労働運動全体で主役になることはなかった。

N : 今は、介護とか保育とか、ほんとに女性が中心に頑張っている職場が多いのに。ファッション産業でアメリカンアパレルでは、2015 年、2 年半かかったが、はなこ、しょうこたちが解雇撤回闘争に勝った。

Ys : 当時も今も重工業系の会社などは男が多い？

YY : 労働組合は、ポジティブアクションというのか、女性社員、組合員を増やせとかもやるべきだ。

一同 : そうだよなー。

YY : 1933 年に入ると、千数百人の検挙で全協本部が壊滅させられ、その後、合法左派の東交執行部は、「ストライキをしない」という「現実主義」の方針を決定してしまう??

Ys : 1933 年から、「満州事変」に伴う軍需生産で日本の景気は良くなる。世の中

「ストなんて」っていう感じだったんじゃないか。

GO: そう! 1933年から1937年をピークに、「紀元2600年」とか言って東京オリンピックも予定されていた1940年には成長率は落ちるが観光旅行がピーク。太平洋戦争の始まる1941年にかけて、敗戦後の「高度成長」にも匹敵する景気が続いた。銀座高島屋の社史にも「1930年から1937年は会社の躍進期」と書いてある。

世の中は、日中戦争になるまでは動員され死傷する兵士もまだ少なく、どっか外でやっている戦争に無関心で国内の景気に「なんとなく浮かれて」いた?

YY: そして、1934年になると、東京市は東交執行部の「現実主義」につけこんで、「全従業員解雇、初任給で再雇用、結果として賃金半減」という激烈な合理化策を突き付ける。

Ng: 「赤字対策」が理由だろうが、市電の利用者数ってこのころどうだったんだろう?

GO: たしかに、いわゆるモータリゼーションなどで減っている。そして、東京市は、「市電収入の96%は市債費」と宣伝した。つまり、市電の収入が減り、市電を維持するためにいろいろ市が借りた債券などの債務の返済費用がほぼ同額になっているということだが、この市債費のうち半分以上は、市電維持に関係のない借金だった。

これって国鉄民営化の時のキャンペーンに似ている。いわく「モータリゼーションが進んで国鉄の利用客が減っているのに職員が働かないで『空(カラ)出張(用もないのに公費で出張する)』を繰り返して国鉄は大赤字なので民営化するしかない」。しかし、国鉄の鉄道運行の経常収支は黒字で、「大赤字」の大半は、敗戦後、国が背負うと言っていたのに国鉄に背負わされた「満州鉄道」の負債と東京オリンピックに合わせてようやく作った新幹線の建設費用だった。

YY: 激烈な通告にさすがの合法左派執行部も立ち上がって、史上最大の40日間全線ストをして、全員解雇・再採用を撤回させ、賃金半減を2割の減額で止めた。

GO: これは、その後、1980年代、政府が国労を潰すために行った国鉄民営化で用いた「国鉄労働者全員解雇・JRで従順な労働者だけ採用」という同様の方式を50年後まで止めた闘争だった。

さらに、国鉄民営化の時は、中曽根首相が裁判官を国鉄に送り込んで、この方式を「合法化」という国家総ぐるみだった。

国鉄民営化以降、大半の労組がストなどしなくなるなかで、動労千葉はストを含めて闘い続けて、2015年に、民営化に反対する動労千葉などの組合員を採用しないというJRの採用差別が「労働組合を不当に扱う不当労働行為」であることを最高裁に認めさせた。

最後に、おまけで、以下の新聞記事をつけたが、さらに東交は、1937年には、市電従業員 5 万人が参加する 23 日間のストをして、1934 年の賃金減額の一部を取り戻している。

次回 10 月 25 日プチ労 116 回は、1930 年代の労働運動で、女性とともに主力になった在日朝鮮人の激しい闘い。レポーターはなおこさん。

おまけ：1937 年 4 月 25 日読売新聞記事「東京市電争議の勃発」



神戸大学経済経営研究所 新聞記事文庫
引用に際して: www.lib.kobe-u.ac.jp/sinbun/use/

<2020-10-25 プチ労 116 まとめ>

参加者：7人 中高年：青年=4：3 地域：それ以外=4：3

メニュー：在日朝鮮人運動に敬意を表して。。

韓国スンドウヴチゲ(絹ごし豆腐鍋)&ニラと小エビのジャン(≒チヂミ)

◎「近現代日本 150 年の労働者・民衆の闘いの歴史」第 2 5 回

レポーターなおこさん

第三章(4)「労働の尊厳の奪還」を広く追及した 1930 年代の労働運動

第五節 1930年代労働運動を鼓舞し続ける在日朝鮮人運動
(第三章後半「草稿」48Pから↓)

<http://tamitoya.web.fc2.com/history13secondhalf.pdf>

おまけ：YouTube「強制徴用地獄・麻生炭鉱に行く」

韓国 JTBC 放送(2019年3月7日、4分30秒)

<https://youtu.be/Nh14UcrjsRU>

1930年代、前に見た女性労働者の闘い以上に労働運動の主輪になり、激しく戦闘的で創造的に闘い続けた在日朝鮮人運動。

「草稿」の種本まで見てポイントをついたレポートがあり、

生きた道も時代も様々な「中高若男女」の多様な切り口のトークが切れ目なく続いて深まったしホント面白かった。

おかげで、

なんで、在日朝鮮人はそんなに激しく闘ったのか。

それが、時代を超えて、今、我々一人ひとりに「あなたって一体何？」って問いかけていること。

今の時代がもう少し見えてきた気がする。

あらためて、「草稿」筆者にとっても、歴史を追っかけることの意味が見えた。

Report

N：☆あっちもこっちもストライキの時代

1930年代、今までレポートしてくれたように、非合法左派全協を軸にして、東洋モスリンの女工、遊郭の女性、市電労働者、地下鉄の「モグラの歌」の闘いがあったが、全協より戦闘的なものすごい勢いだったのが、在日朝鮮人労働者の闘い。

☆在日の人がどれだけいたか？

「朝鮮併合」で土地を日本に盗られて食えなくなった朝鮮の農民が、「満州」に150万人、日本に100万人渡った。合計250万人で、当時の朝鮮半島の人口2千万人の12%。

GO：これは、中国の海外華僑の比率よりも多くて、ユダヤ人を除けば、日本は朝鮮民衆を世界最大の「流浪の民」にした。

N：日本にやってきた朝鮮農民は、農業をやるわけではなく工業労働者になるしかなかった。

おまけに、日本人が嫌がる炭鉱・土建業や繊維・化学・ガラス・ゴム・窒素の工

場での「きつい・きたない・危険」の3K仕事で、賃金は、平均して日給が日本人2円に対して朝鮮人は半分の1円。

☆全協と一体化した闘い

1930年代に入り、それまで独自に闘っていた在日朝鮮人は、全協に加盟して闘い、人数、現場での闘争の質量ともに主力になったのに、日本人からは「荒々しく、原始的、単純、頑固、粗暴なまでに戦闘的」とか言われて、労働運動の中でも差別があった。

☆それでもすごい闘い

たくさんあるけど、いくつか紹介する。

○愛知県の山間の三信鉄道工事現場の争議。

朝鮮人労働者600人が未払い賃金を求めて、労働組合の前身であるストライキ委員会を初めて作って闘った。1300人の警察や暴力団の弾圧に対して、近隣の日本人農民や村の消防団が応援して勝利した。

○新潟県水原の耕地整理工事現場の争議。

朝鮮人労働者と近隣農村から雇われた日本人人夫、計350人が賃上げと労働条件改善を求めて共同闘争をした。賃金は、都会より低く日給が朝鮮人70銭、日本人人夫男が50銭、女が20～30銭。

注目されるのは、差別されている朝鮮人労働者が、より賃金が低い日本人人夫の賃上げのために「同一労働・同一賃金」を要求したこと。

これって、アベが「働き方改革」で打ち出したのと真逆の本来の同一労働・同一賃金。アベのは、正規労働者の賃金を非正規労働者の水準に下げること。

○岩手県矢作村の鉄道工事現場の争議。

朝鮮人労働者700人が低賃金なのに日用品は高価格、長時間労働に抗議して全面勝利し労働組合もできたのに、下請け業者と警察と、酒を飲まされおだてられた日本人労働者も加わって3人が虐殺された。

○九州福岡の麻生炭鉱争議。

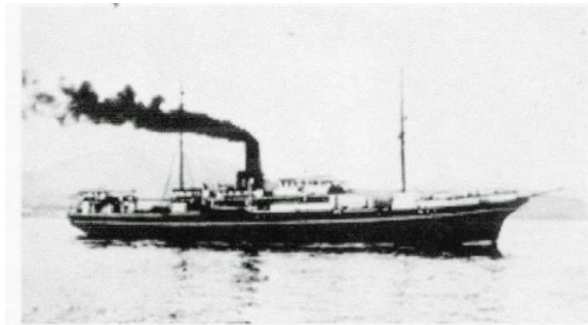
朝鮮人労働者が、さらにひどい虐待に抗議したのが、現財務大臣アソウ太郎の実家麻生炭鉱争議。親父が社長だった。麻生は、その後も朝鮮からの強制連行「徴用工」を使って財閥になったのに、今も、一切「そんなことはなかった」と開き直っている。(YouTube 動画参照)

警戒線を突破し
 総罷業のヒラ撒き
 麻生炭坑争議愈々尖鋭化し
 けさ五十六名検束

在日朝鮮人麻生炭鉱争議

○ユニークなのが、大阪の「東亜通航組合」の運動。

大阪には、朝鮮半島の南端で九州からはすぐの済州島(チェジエド/せいしゅうとう)の出身者がたくさんいた。故郷に里帰りする日本の汽船の運賃の値下げを交渉しても下げないので、組合を作って自ら船「伏木丸」を購入して運行した。大阪在住の済州島出身者のほぼ全員、1万人が加盟して、労働運動・民族解放運動の一大拠点となった。



東亜航の第2備船「伏木丸」

朝鮮航路に「われらの船」
 済州島出身者らが 備船して三社に對抗

済州島出身の大衆を以て母国から輸入船の運賃を交渉する「われらの船」が、この航路に出現する。この航路は、済州島出身者の故郷に里帰りする日本の汽船の運賃の値下げを交渉しても下げないので、組合を作って自ら船「伏木丸」を購入して運行した。大阪在住の済州島出身者のほぼ全員、1万人が加盟して、労働運動・民族解放運動の一大拠点となった。

この航路は、済州島出身者の故郷に里帰りする日本の汽船の運賃の値下げを交渉しても下げないので、組合を作って自ら船「伏木丸」を購入して運行した。大阪在住の済州島出身者のほぼ全員、1万人が加盟して、労働運動・民族解放運動の一大拠点となった。

この航路は、済州島出身者の故郷に里帰りする日本の汽船の運賃の値下げを交渉しても下げないので、組合を作って自ら船「伏木丸」を購入して運行した。大阪在住の済州島出身者のほぼ全員、1万人が加盟して、労働運動・民族解放運動の一大拠点となった。

大阪朝日新聞(1930.4.17)

☆闘いはずーっと続いた その時も今も残った課題

1934年に入り、日本共産党も全協もつぶされ、全協の朝鮮人活動家も800人が逮捕されたが、朝鮮人労働者は闘い続けた。

知らなかったが、1940年に日本の労働組合がすべて解散して、アジア太平洋戦争が始まっても闘い続けて、敗戦後、いの一番に立ち上がり、事務所と資金を提供して日本共産党を再建したのも朝鮮人労働者たちだった。

そういう朝鮮人労働者の闘いを支えたのは、「差別と搾取」という二重のくびきのなかで、「自分たちは尊厳のある労働と生活をする人間だ」という強い思いだったと思う。

その時も今も、私たちに突き付けられている課題というのは、前にUYさんが言った「日本は一度も謝ったことがない」という「侵略」、それにとまなう「差別」がどこからきているのかということ。

それから、「日本は、自分が何者であるか見失った歪んだ侵略者のナショナリズム」と「草稿」にあるが、朝鮮人労働者の「思い」に対して、昔も今も「私たちはそれでいいのか」ということ。

Talk

UY：植民地支配、慰安婦・徴用工で、「日本は一度も謝ったことがない」というのは、たしかに、僕の持論で、1990年で見ると賠償額もドイツと日本は20：1。でも、謝り続けるドイツでネオナチが復活しているのに対して、日本が国として謝らないからこそ、逆に真摯に問題をみようともしえる。

MG：でも、やったことは変えられない。

UY：ドイツのネオナチ復活が「謝っているのに、許してくれないなら、じゃーいいいよ」ということなら、本当は謝るべきだけど、それより、まし？

MG：でも、ネオナチより、日本のネトウヨ的なものはすごい。

UY：産経新聞的っていうか、ネトウヨ的な人も、心の中では、「謝ってない」と思ってる。

YY：そういう人は、「謝っているのに」「賠償したのに」「国際法違反」という。

MM：ところで、1930年代、三信鉄道工事の争議で「日本人農民が食糧を朝鮮人労働者に援助」したのはなぜだろう？

GO：山間地の峡谷の難工事で、自分たちも農作業が大変ななかで、朝鮮人労働者の大変さがわかっていたこともあるだろう。

YY：農民にとっても鉄道を通してもらうことが大事だったんじゃないか。

N：つい最近、たみとやへ毎日遊びに来る小学2年生たちが、毎週のこども塾にも来たいと親に聞いたら「あそこは日本に反対しているからだめ」と言われたと言っていた。この表現には驚いたが、最近、そういうのが広がっている？

MG：ほんと、最近、ネトウヨ的勢力が広がっていると言われる。

MM：1930年代とも違って、最近のそれは、いつから、どういうきっかけなんだろう？

MG：そういう小学生の30代？とかの親が「日本に反対するのは。。。」というのは、ネトウヨ的、朝鮮人差別ということだけじゃなくて、自分ていうか、アイデンティティ(identity)を失った結果。それが先じゃないか。メディアやSNSや教育で。

GO：前に、MKくんが、「自分は、“ゆとり世代”の第一世代。“ゆとり教育”では、“起業”ばかり教える。でも、起業して成功するのはごくわずか。成功できないで、一人一人に残るのは、国籍と日本人ということだけ。」と言っていた。

MG：そうやって、1990年代から、自分さがし、アイデンティティ探しが求められ始めた。

AS：それは、“ゆとり世代”より、もうひとつ前のバブル崩壊で始まった“氷河期世代”からなんじゃないか。うちの姉がそうなんだが、与えられるものがない、開拓しても報われないっていう感じだった。

一同：おー！

YY：私が“氷河期世代”。自分の前後の時代、急速にネットとかLINEとか発達してきた。ネトウヨ的というのも、ネットを通じて、増えてきた、見えてきたのではないか。

MG：たしかに、この間、若い世代だけじゃなくて、中高年もワイドになってきた。

YY：そういう「差別感」は、昔も多かったんじゃないか。それが、ネットの発達で見えて来ただけなんじゃないか。自分の母親も「朝鮮人きらい、こわい」だった。逆に、今の若い人は、結構、K-popにしろ、韓国とか韓国の人が好きだ。

N：おーそうだね！ 歴史を勉強して、うちの母親がすごく「こわい、嫌い」と言っていたのがわかった気がする。今日もやったように、目の前で、在日の人たちが、本当に怒っていたし、激しい闘いをしていた。そこから、また「差別感」が高まったのか。

GO：それにしても、MGくんが言ったように、今は、「差別感」っていうより、アイデンティティの喪失っていうか、自分て何か？が問われ、感じているのかも。歴史を振り返ってみると、多くの日本人って、「自分は何か？」を考えなくてすんできている気がする。自分もその一人だと思う。逆に、朝鮮人学校の闘いを取材した「アイたちの学校」というドキュメンタリーでは、今も、在日の青年

が「俺たちは何者なんだ」と言っていた。



YY: ドイツは、周りから激しく攻め立てられて、歴史を振り返ることになった。日本も、1990年代、朝鮮の慰安婦の人が証言を始めた時くらいに、アメリカから激しく攻められていたら、国として「謝った」のかもしれない。どうして、アメリカはそうしなかったのかな？

GO: 丁度、1990年代が始まる時に「冷戦」が終わった。だけど、アメリカと日本は、要りもしない「冷戦の産物」日米安保を強化して日米同盟を強めて、何とかして「冷戦の時代」を維持しようとしてあがいている。逆に、韓国は、1987年に民主化を達成して慰安婦の証言も出てきた。その民主化闘争を踏まえて自分たちで憲法を作り直して、「冷戦後」の世界を創ろうとしている。韓国の青年の方がさわやかに見えて、日本の青年が「あこがれる」としたら、それもあるのかも。

MG: そういう意味でも、「草稿」60頁の下の方に、在日朝鮮人運動が訴えたのは「自己のアイデンティティを求めるナショナリズム、すなわち民族解放運動だった」とあるが、「ナショナリズム」は必要ないんじゃないか。ナショナリズムって国家主義っていうか、フィクションでしかないと思う。

GO: その言葉は、日本に村人が大量虐殺されたソウルの近郊の村の教会の韓国入牧師が言った言葉だけど、アイデンティティを求めることをナショナリズムっていう必要はなくて「運動」でいいかも。

N: もうひとつ、今、出てきた、「民族解放運動」も、それが何か、歴史で見て考えていく今後の課題だと思う。歴史のなかで、民族解放闘争と労働者解放闘争はたえずせめぎあっていて、時には、労働者が解放されれば、すべて解決っていう雑駁なことも多かったようだ。

次回 11月29日プチ労 117回は、この間やってきた1930年代日本の労働運動のまとめというか、振り返り。感想、意見などよろしく。

以上

<2020-11-29 プチ労 117 まとめ>

参加者：7人 中高年：青年=3：4 地域：それ以外=5：2

メニュー：ハンガリーグーヤッシュ(ハンガリー農民が貴族に与えられた残り物の硬い牛筋を野菜とパプリカで柔らかく煮込んだ)&Mina 手作り差入れ自然農香り米「プリンセスサリー」の鶏ガラスープ炊きライス。完食。Mina ライスだけを賞味している人も。

◎「近現代日本 150 年の労働者・民衆の闘いの歴史」第 27 回

レポーターGO

第三章(4)「労働の尊厳の奪還」を広く追及した 1930 年代の労働運動

第六節 労働組合壊滅 しかし、吹き続けていた労働者の蒸気

付録：1930 年代朝鮮の革命的労働運動の「滞空女(たいくうじょ)」

(第三章後半「草稿」61P から↓)

<http://tamitoya.web.fc2.com/history13secondhalf.pdf>

6 月からの 1930 年代日本の労働運動のまとめ。

面白かった。

Talk で、近代以前の歴史まで広がり深まった。

まず Report。

「戦争を止められたかもしれない 1930 年代の激しく「労働の尊厳の奪還」を追求した労働運動が、それを果たせなかったのは、我々に今もある朝鮮人差別、女性差別、農民差別だった。

そして、今も、我々、労働者・民衆が主人公になっていくために求められているのは、朝鮮人・女性・農民に関わらず民衆に共通した「労働の尊厳」をもっと見据えいくことである。」

そして Talk。

じゃあ、もっと見据えるために、実際、「差別」をどう乗り越えていくのか。そのなかで、「女性差別」がどう形作られてきたかをめぐって、「草稿」筆者がまったく疎い近代以前の歴史、特に、民衆の「心情」を形作るのに大きな影響を与えてきた仏教の歴史について、みんなに教えてもらった。

それは、「差別」を統治に利用した支配者と「自然」を旨とした民衆とのせめぎ合いの歴史でもあり、今にも続く。

また、労働運動からみて農民への「差別」の元ともなった、そして、我々に今も続く「土地への執着」が話題になった。

それは、「女性差別」とともに、天皇制とそれが生み出した戦争を支えた。

「女性差別」と同様に、「土地への執着」の問題は、農民にとって「せめぎあ

い」の歴史だったが、次の日本の農民運動を見るいい入り口にもなった。

Reporter GO：まとめとして、あらためて、労働団体の動きを見ると、「満州事変」が始まり、日中戦争へと進むにつれて、労働組合の大半は、戦争を支持する「右傾化」をしていった。

その代表の一人、戦闘的な労働運動も担ってきた社会大衆党の書記長麻生久の「右傾化」の理屈は次のようだった。

「無産大衆のためといくら頑張っても、労働運動は、社会全体からみれば少数のままだ。

『満州事変』は、本来、民族の生存を確保するためにおきた。無産大衆は民族の多数者だから、この戦争は無産大衆のための戦争であり、支持する。

無産大衆が天下をとって社会主義革命をするために、こうした無産大衆のための戦争をする軍部も利用する。

そのためには、『錦の御旗』が必要なので、戦争をする頂点である天皇制も支持する。」

しかし、多くの労働組合が「右傾化」しても、労働者の戦闘的な「蒸気」は吹き続けていた。実際、労働争議が一番多いのは、日中戦争が始まる 1937 年だった。この「蒸気」をどう受け止めればよかったのか。

三つの具体的な切り口があった。

まず、見てきたように労働運動の主力だった女性労働者と在日朝鮮人とが、二つの切り口。

彼らをどうして主役にできなかったのか。

そこには、両者への差別があった。

朝鮮人差別は、侵略が生み出し、女性差別は「家」制度が生み出し、それらに共通するのは天皇制である。この差別を乗り越えることを通じて、天皇制打倒も現実的な運動として作れたかもしれない。

三つ目の切り口は、「右傾化」した労働運動に対して、一貫して「左派」だった農民運動である。

一般に、労働運動には「農民は土地に執着しており、社会主義など理解せず我々が指導する」という蔑視があった。

詳しくは、この後見ていくが、農民運動の力をもっと生かすべきだった。

そこにあるのは、見てきたように、1930 年代の労働運動が激しく追求した「労働の尊厳」を朝鮮人、女性、農民に関わらず、民衆に共通するものとして、もっともっと見据えていくことだったのではないか。

これは、まさに、今も問われていること。

Talk

UY：麻生の言う「無産階級」って？

GO：マルクスの言う「プロレタリアート」とほぼ同じ。

UY：「何も生み出さない」という卑下した感じもする。

GO：「何も財産を持っていない」という意味だと思うが、たしかに、「上から目線」の感じもする。

YY：「無産階級」に農民は入るのかな？ 土地を少し持っている農民もいるが。

GO：そうそう。次の農民運動でも見るが、小作農民と自小作農民がともに闘っている。マルクスは「生産手段を持たない人がプロレタリア」というが、少し位の農民の土地は、「生産手段」ともいえないと思う。

Mg：ところで、地主と小作っていつからあるのか？ 東北地方だと、共有地があって、一種、共産主義的な感じがある気もするが。

GO：明確にしたのは、明治維新の地租改正から・・・

MK：古来、財産が出来てから、土地を持つ者と持たない者はあったと思う。

N：最近、親戚の相続問題を見て、今も、労働者であっても、ほんの少しの土地でも、土地をめぐる「執着」というのはあるんだなとあらためて思う。

YY：ほんと、一般に貧乏人同士だからこそ、少しの財産をめぐって争うのはあると思う。連帯すればいいのに、教育なのか・・・

UY：土地は、草が生える。その他にも、いろいろなものを生み出すっていう感じがする。それが自分の物だと楽しみ。

GO：そういう意味でも、次の農民運動で見たい。

農民は単に財産として土地を欲しがったのか、あるいは、作物を生み出すために営々と土地を育て続けたのか。農民運動の歴史は、その「せめぎあい」でもあった。

N：ところで、差別というと、朝鮮では、儒教を利用した女性差別がひどい。

GO：今後、日中戦争を中国側から見るために調べたら、魯迅にしても、纏足をした親が決めた女性と結婚した。日中戦争は、彼らにとって、日本との戦いであるとともに、儒教に基づく中国の旧習との闘いでもあった。

一方、日本では、社会学者上野千鶴子によれば、「旧習の名残」というより、明治維新の「発明品」として、あらためて「家」制度を制度化した。

「家」制度は、前に明治維新の「発明品」と言った天皇制とともに、日本が国全体として、天皇を頂点としたひとつの家族であるという国家観を創り出した。

N：日本は、天皇制による女性差別だが、儒教に基づくものでもある。

MK：儒教だけでなく、仏教に女性差別がありまくり。

5年間、豊川稲荷での仏教講座を受講したが、原始仏教にはなかった女性差別が、その後、定着し、日本では、7世紀、仏教を輸入した蘇我入鹿は、女性差別を含め統治に都合のいい部分だけを取り入れた。

Mg：僕は、哲学者の内山節さんの毎月の勉強会に出て、仏教思想の流れについて聞いたのだが、民衆レベルの土着仏教としての受け入れは違った。古来からの自然を敬う流れに沿って、「自ずから然り」、自然が本来正常なものという思想になった。

YY：自分が勉強してきた日蓮は、「女性別枠」と言った。これは女性差別ともいえるが、一方で、日蓮は国政を批判し続けた人でもあり、女性差別の問題を主張したともいえる。

MK：日蓮とは別だが、同じ鎌倉時代に、法然を受けて親鸞が、それまでの仏教のあり方を批判して、民衆の解放のための仏教を唱えた。

支配者の側は、歴史を通じて、戦争するために「司令塔」の構造をつくる必要があった。

戦争は、人々が「執着」する土地を増やすためであり、人々に土地を持たせて安心させた。

GO：あらためて、それを明確にしたのが地租改正か。

MK：そして、仏教で、せめぎ合いながらも維持されてきた女性差別は、天皇を頂点に、男が頭になることで、司令塔がうまく機能するようにすることだった。

GO：明治以降の「家」制度は、儒教倫理とともに、それをあらためて明確にしたものか。

GO：最後に、付録として、1930年代朝鮮の革命的労働運動の象徴的事例を付けた。

これは、今も韓国で続く「高空籠城」闘争を史上初めて実行した女工の話だが、日本と同じく女性労働者が頑張った。

彼女たちが訴えたのも、「飯と人が中心の世の中」。

日本と同じ「労働の尊厳の奪還」だった。

12月は、恒例望年会。

次回プチ労118回は、来年1月24日、むぎたさんレポーターで、「一貫して『左派』だった農民運動」。

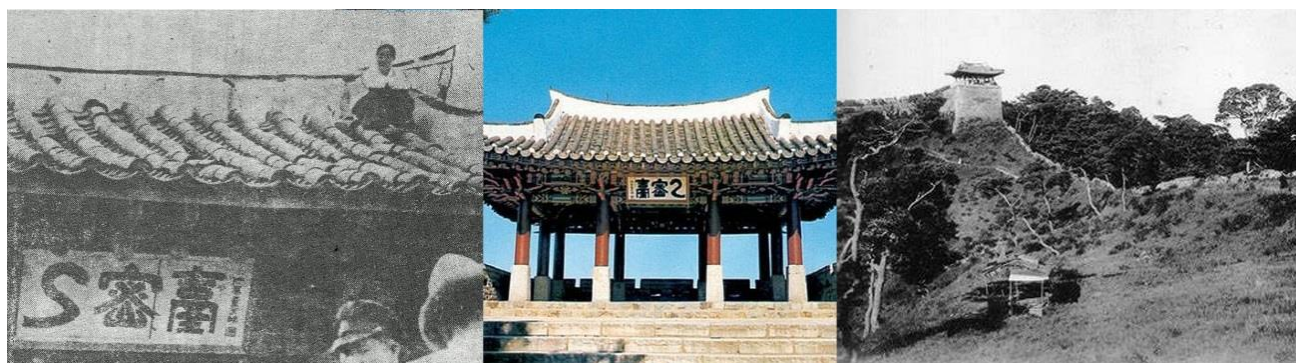
以上

付録

○1930年代朝鮮の革命的労働運動の「滞空女(たいくうじょ)」 2020.11.29

1931年、ゴム製靴工場の女工、姜周龍(カン・ジョリン：1901生～1932没)は、大都会平壤(ピョンヤン)の小高い丘に建つ楼閣「乙密台(ウルミルテ)」の屋根に登り、朝鮮の労働運動史上初めて「高空籠城」という占拠闘争を実行した。

1930年11月、日本の富士紡川崎争議で「煙突男」が出現した半年後だった。



1931年5月、平壤の平元(ピョンウオン)ゴム製靴工場は、日本人労働者の1/4、朝鮮人男子労働者の1/2でしかない女工賃金の削減を一方向的に通告した。蒸されたゴムの臭いにむせながら働く平壤のゴム製靴労働者2300人全体の賃下げの先駆けであり、今にもゼネラルストライキが起る情勢だった。

姜は、49人の女工たちとともに、「賃下げ決死反対」を掲げてストライキに入ったが会社は要求を聞き入れず、全員でハンガーストライキ(ハンスト)に突入し、工場を占拠したが、日本の警察に排除され解散させられた。

それでも、朝鮮農民運動、労働運動の一貫した念願である「飯と人が中心の世の中」を求める彼女たちの闘いを広く知らせるために、決死の想いで実行した姜の占拠闘争は、「滞空女」と大きく報道された。

そして、それに続く闘いが功を奏し、要求通り賃金削減を阻止した。

彼女が屋根の上から闘いの目的を語る楼閣の下には人々がすし詰めになった。

「・・・これがやがて平壤2300人のゴム職工全体の賃金引下げを招くおおもとなるから、だからあたしたちは死を覚悟して闘っているのです。」

彼女は、組合に入って立ち上がる時にはこう語っていた。

「実はあたし、モガ(モダンガール)になるのが夢でした。でも今はストライキ団で先頭に立つのがあたしの願いです。・・・女工はつまらん、モガはご立派、そんなんじゃないってこと。みんな同じ、人間だってこと。・・・あいつらがあたしたちのこと人間とっていないことは確かです。あたしたちが人間だってことを・・・あたしたちの団結の意志をゼネストで見せつけてやるべきです。・・・あえ

て力を込めてもう一度言いたいと思います。この姜周龍がゼネストの先頭に立ちます。」(パク・ソリョン「滞空女—屋根の上のモダンガール」2018年)

しかし、その後、姜は、平壤革命的労働組合にも加入したことが発覚し、日本の警察に逮捕され、獄舎でも断続的にハンストを繰り返す妥協しない獄中闘争の末、極度の神経衰弱と消化不良になり1年で病気保釈となった。

2か月余りの闘病後、1932年8月13日、31歳の若さで死去した彼女の葬儀は、日本の弾圧のなかでも、男女の同志百人あまりが集まって行われた。

日本からの解放後、南北分断と朝鮮戦争、そして、独裁政権の弾圧で抑圧されていた韓国の労働運動は、1970年11月の「労働基準法を守れ」という全泰壹(チョンテイル)の焼身を機に、民主労組運動として広まった。

1995年には、全国組織として全国民主労組総連盟(民主労総)が結成された。

その間に、姜周龍の意志と「高空籠城」闘争も蘇った。

1990年4月から13日間、釜山(プサン)の近隣、蔚山(ウルサン)市の現代(ヒョンデ)重工業労組の70人余りが、弾圧に立ち向かって、高さ82メートルのクレーン上で占拠闘争に取り組んだ。

2011年1月から11月まで、釜山の韓進(ハンジュ)重工業で解雇された女性溶接労働者、金鎮淑(キム・ジンスク)は、仲間が命を絶った高さ35メートルの85号クレーン上で309日間、リストラ中止を求めて占拠闘争を続け、共感した市民を運んだ「希望のバス」という支持と連帯の新たな運動を生んだ。

2013年、民主労総指導委員になった彼女は、汗だくの労働者の背中に咲く「真っ白な塩の花」を意味する著書「塩花の木」を発表し、解雇労働者の孤独な出勤闘争から始まった闘いが、「私も同じ労働者、だから、“希望のバス”に乗って釜山に行こう！」と、人々が連帯した社会的な闘いへ変化したことを伝えた。

2020年2月には、大邱(テグ)近隣の嶺南(ヨンナム)大学医療院労組破壊に対して、民主労総保健医療労組の看護婦パク・ムンジンが、227日間、地上74メートルの「高空籠城」の末に、解雇者の復職と組合活動の自由を獲得した。

なお、2007年、盧武鉉(ノムヒョン)政権は、62周年を迎えた光復節(クアンボクチョル：8月15日、解放記念日)に姜周龍の抗日闘争への貢献を表彰した。

そして、金鎮淑の「高空籠城」闘争の時に、初めて、姜周龍を知ったという女性作家パク・ソリョンが、歴史に埋もれた姜の生き様を描いた小説「滞空女—屋根の上のモダンガール」は、2018年ハンギョレ文学賞を受賞した。

それも踏まえて、2018年、文在寅(ムンジェイン)大統領は、73周年の光復節の祝辞で、あらためて、「女性解放、労働解放」を叫んだ志士として彼女に言及した。

<2021-1-24 プチ労 118 まとめ>

参加者：6人 中高年：青年＝2：4 地域：それ以外＝4：2

メニュー：牛筋煮込みと冬野菜(牛蒡・蓮根・人参)きんぴら丼。完食。

◎「近現代日本 150 年の労働者・民衆の闘いの歴史」第 28 回

レポーターむぎたさん

第三章（5）「国体」を掘り崩す農民運動(前半)

第一節 敗戦まで一貫して左派が主流だった農民運動

第二節 農民各層が結束した新潟王番田(おうばでん)の大争議

1930 年代、激しく闘った農民運動の前半。

「総有を取り戻せ！～戦前期の農民運動と今～」で始まる気合いの入ったレジメで、レポーターが「ガッツリ」レポートしてくれた。(添付 PDF 版参照)

このレポートで尽くされていた。というより「よほど増えていた」ので見てほしい。

まず、どのように地主と小作が生まれて来たのか、さらに、農民から賃労働者が生まれて来たのか、「草稿」の前史を補ってくれた。

次に、「草稿」の扱った新潟王番田(おうばでん。「草稿」の“おうばんだ”は誤り。読みも直してくれて多謝!)の大争議を「99%vs1%の闘いに大勝利」として、生き生きとレポート。

「草稿」の種本から、争議参加者数を耕作規模別に数え上げてくれて、最小規模の貧農を組合長として、中規模の中農に渡る各層が最後まで脱落者を出さずに闘ったことをリアルに伝えてくれた。

実際、この争議は、戦前でもようやく 1938 年農地調整法に登場し、今では当たり前前の(しかし、再び、三里塚市東さんの闘いで国が踏みにじろうとしている)「農民の耕作権」を 1930 年に認めさせた歴史的争議だった。

最後に、レポーターは、「農民は、労働運動より『左派』として、なぜ体制と闘い続けたか」として、「農村には、『占有』に対立する『総有』の価値観が根付いているからだと言う。

「総有」とは、「草稿」筆者は初めて聞いたが、哲学者内山節が言ったという「他人と自然と結び合う関係性の世界で生きてきた人々の実感。『村も田畑も自然も共同体みんなのもの。』みんなとは『今生きている我々・先祖・そして自然』マルクスのいう「協働」や「共有」、若い経済学者斎藤幸平が最近訴えている「脱成長コミュニズム」の核となるとあらためて言う「コモン(共)」にも似ているが、深い感じがする。

さらに、「総有」を手掛かりに、「これからの労働運動と農民運動どうあるべきか」にもトライしてくれた。

それは、どんどん「総有」が切り崩されていく中でも、都市にも「総有」は存在する。だから、労働運動、そして農民運動の課題は「資本の総有化」だと提起した。

「総有」がなくなっていることについて意見が相次いだ。

As：こどものころ、そこにあった原っぱ、ひろばがなくなった。

N：今は、「空中権」だとか「地下権」だとか言っている。

MM：金になりそうだと、「排出権」など、後付けで次々と作っている。

N：逆に、「デモは許可が必要」なんて、みんなが寄り合うことを否定している。

一方、1930年代農民運動を見ると、農民たちは、まさに“闘う中”で、あらためて「総有」を意識し、天皇制国家の体制「国体」に立ち向かい、掘り崩していったのだと思う。

次回2月28日プチ労119回では、1930年代農民運動後半、北海道蜂須賀大農場での「田畑」をめぐる激しい大争議を見る。

そこで、より具体的に「総有」について、あるいはその「取り戻し」について、さらに、今、どこにどんなふうに、それを「闘う（あるいは闘いうる）人々」がいるのかも、みんなで議論していけたらと思う。

以上

<2021-2-28 プチ労119まとめ>

参加者：7人(久しぶり MH くん参加♪) 中高年：青年=2：5(青年率最高) 地域：それ以外=4：3

メニュー：春のちらし寿司(穴子)&牛肉と牛蒡のしぐれ煮(完食) 寿司は一升炊いたがほぼ完食。

◎「近現代日本150年の労働者・民衆の闘いの歴史」第29回

レポーターむぎたさん

第三章(5)「国体」を掘り崩す農民運動(後半)

第三節 「地主的土地所有」を追い詰めた北海道蜂須賀農場大争議

第四節 農地改革を準備した農民運動－「土地を農民へ」の意味

前回に引き続き、気合いの入った「土地を農民へ～農民的土地所有・終わりのな

き闘い～」と題するレジメとレポートで、第三章最後がよく締まって終わった。
(添付 PDF 版レジメ参照)

蜂須賀大争議は、天皇を頂点とした地主支配体制＝「国体」と原野を艱難辛苦して優良田に変えた開拓小作農民とが正面から闘った農民運動の象徴的な争議。「小作料を払い続ければ土地を分譲」という農民の分断を図る地主の欺瞞政策に一旦乗った多くの「分譲派」農民も、長期にわたる闘争の中で「非分譲派」農民と再び一致団結して闘い、「地主的土地所有」を追い詰め、敗戦後の農地改革を準備した。

それは同時に、農民にとっての「土地の本当の意味」を示した。

開墾の辛苦や農民の共同体の実相もリアルにレポートされて(レポーターお勧め参考文献「名家三代、米作りの技と心」草思社)、「草稿」が「ずっと増えた」。それだけでなく、前回、農民が激しく闘い続けた動力としてレポーターが提起した、農村における「総有」についても、現代の闘いの大切な切り口としてレポートとトークで深堀できた。

Report

Reporter Mg : なぜ最後まで農民は結束を維持できたか？

前回見た伝統的な本州の農村同様に、開拓農場にも随所に「総有＝村も田畑も自然も共同体みんな(今生きている我々・先祖そして自然)のもの」があった。

「隣百姓(隣よりも一日でも早く、少しでも豊かに)」や「水争い」、「地主の顔色伺い」など小作農民のしょうもなさもある一方、「地神講(いろいろな神を祭る集まり)」「無尽講(金を貸し合う)」「田植え人(田植えの相互の手伝い)」など共同体としての関係性があった。

そして、土地は、単なる財産というより、収穫をとるだけでなく、恵みを得るために代々絶えず良くしていくものだった。

「米は、土と水と太陽でできる生前からの頂き物」

農民は「保守的」といわれるが、農村の共同体は、自然と先祖に感謝し、子孫を思って土地を守り耕す「保守」。

資本家の利潤のために大切にしている関係性が壊されるとき、闘争の地盤となりうる。

土地を収奪するだけの「地主的土地所有」に対して、「稲の顔を見てする農業」、農地を介した自然との循環のなかで収量を上げ、農民自らの創造性を解放する「農民的土地所有」のためにこそ、激しく闘った。

一方で、共同体ごと利権に絡めとられる危険性もある。

1960年代以降、大部分の農村は後継者不足と機械化で、追い詰められた共同

体の利権を死守するだけの卑屈な「保守」になった。

現代の「左翼」や「リベラル」は、(西欧近代的な)「個」に対する正論を言うが、「共同体」に響く言葉が必要ではないか。

「終わりなき農民の夢・闘い」は今も続いている。労働者協同組合もそうだが、あらためて、「協働」「共同」「協同」という形で農業をやろうとしている人たちも結構いる。

Talk

YS：そもそも、なんで北海道の原野で「米」をつくらなければならなかったのかな。

GO：たしかに朝鮮も中国も南部は「米」だが北部は「小麦」。そこに、明治維新から「米＝瑞穂の国」と言って出発し、朝鮮侵略の動機にもなり、そして搾取・収奪するだけの地主支配体制＝「国体」の矛盾が出ている。

N：石牟礼道子さんと藤原新也さんの対談「なみだふる～共振する二つの土地 水俣と福島」を読んだところだが、水俣では、「チッソ」は電気をもたらしてくれた有難い会社になっていた。レポーターもいったが、共同体ごと絡めとられた歴史がある。福島原発もそうだ。それに打ち勝つのにすごい時間と苦労がある。

YS：原発では、それが来れば「出稼ぎ」しないで済むというのがあったと思う。

MK：現代では、すべてが「合理性」。食糧も「コスト」。電気がそうだが、みんなが「消費者」になってしまっている。

YY：原発にしる、その危険性の知識があまりになかった。

N：たしかに。でも、現代でも、原発事故も経験しているのに、山口県祝島の原発つくろうとして、祝島の人たちは反対し続けているのに、すぐ対岸では賛成派がほとんど。

YY：みんな、なにかと「遠くの事」。自分の利害に相当関わってこないと問題にしない。現代の単純じゃない複雑な世の中のなかで、素朴に声を上げにくい面もある。

MK：その意味でも、石牟礼さんの「苦海浄土」は世界初の公害小説。あれこそノーベル文学賞をあげるべきだ。

(たみとや後日談)

GO：たしかに、現代で見るべき共同体の力、「総有」の力があると思う。

しかし、レポーターもみんなもいうように「共同体のせめぎあい」もある。

資本主義が見せる「豊かさ、便利さ、速さ」にからめとられる。

次に見る「日中戦争から敗戦」でも、「隣に負けられるか！」という意識が南京大虐殺を起こしたという総括もある。

その「せめぎあい」にどう負けないようにするか。

蜂須賀農場争議では、まさに「闘い続ける」なかで、「隣百姓」意識よりも「連帯」ということを実地に認識していったのではないか。

N：そのためにも、当時の争議で、全国農民組合の応援は大きかったと思う。自分たちだけじゃなくて、全国に仲間がいるということが大きい。現代の沖縄でも福島でもそうだと思う。日本中、さらに世界の人がともに闘うことがもっと必要。

今回で1930年代前半を中心とした第三章を終了して、次回プチ労120回は、第四章「日中戦争から敗戦～昭和天皇の戦争」(1)1937年日中戦争～昭和天皇の「勇気」の概説をします。

新しい「第四章(草稿)」を配りますので、資料代300円をお願いします。

以上